

二つの点でダブルスタンダードを要望したのは流域委員の側である

2005.09.11 委員 本多 孝

狭窄部上流の目標洪水について、猪名川と他の河川での目標が違う点が問題になっています。このことを河川管理者のダブルスタンダードと疑問視する声があるが、ダブルスタンダードを取ったのは、流域委員の側です。

また、ダブルスタンダードは、狭窄部の目標洪水を既往最大と違う目標に設定しただけでなく、提言で「狭窄部は原則開削しない」とした点についても開削を猪名川では前提としています。ダブルスタンダードは二つあります。

第1期の流域委員として、猪名川部会の経過について報告しておきます。第1期流域委員会猪名川部会では、もちろん狭窄部上流で、既往最大の洪水に対して、狭窄部を原則開削しない方向で議論してきました。この点を軽視したことはありません。

しかし、いかなる方法を講じても解消させる方策が見つからずまた、既往最大洪水が、他の淀川水系の狭窄部上流と比べても特異なため、流域委員の側から、目標洪水の見直し提案がされてきたものです。また、狭窄部の開削についても他の保津峡や岩倉峡との違いから開削も検討するように委員の側から提案されてきたものです。さらに住民対話集会の中でも出てきた住民意見でもありました。

河川管理者は、その議論を反映してくださったものと理解しています。

その結果、前期のダムワーキングでもこの検討結果を河川管理者が報告することになったし、その内容で、今期の委員会は、河川管理者の「ダム方針」の余野川ダムの「当面実施しない」に「賛成」を表明してきました。

二項目にわたってダブルスタンダードを進めてきたのは猪名川部会の側の立場と言えらると思います。議事録にはこの点が克明に記録されています。

また、余野川ダムの有効性については、狭窄部上流では、一庫ダムの利水容量の振り替えで効果があるが、この効果は小さく上流に対しては、有効性がないと思います。さらに無堤地区解消後、狭窄部を開削した際の水位上昇については、河道掘削の方が余野川ダムより費用対効果が良いように思います。また環境面でもダムがもたらす、自然環境への影響を考えると余野川ダムを「当面実施しない」と判断された河川管理者の「ダム方針」を歓迎したいと思います。

この結果は、前期流域委員会、前期猪名川部会、前期ダムワーキングの精力的議論の経過からと思います。

河川管理者が、資料により前期の報告、学習会、視察を重ねてこられました。前期委員として、委員会の活動報告を新委員に充分してこなかった点を、反省しなければならないと思います。